

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

京都大学

前期日程

科目

国語(現代文・理系)

総括

出題数		現代文 2題、古文 1題	
難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

□は、昨年度に引き続き随想からの出題であり、小説家が、明治以降の日本におけることばと人間の関係のあり方について、愛という言葉をめぐる思索した文章であった。本文字数は昨年度からほぼ変わらず、3000字程度であった。本文内容は昨年よりやや難しく、設問についてはまわりをまとめるだけでは必ずしもうまくいくとは限らないものを含んでいた。その点で去年よりも難しい出題であった。それゆえ設問の求める範囲を明瞭に特定し、必要にして十分な内容を適切な表現で解答するのは簡単ではない。設問数は昨年度と同様であり、漢字の書き取りは出題されず、記述説明が4問であった。設問は部分要旨的な内容理解を前提としたわかりやすい説明を求めるものが中心である。解答記述量は昨年度の12行から2行の増加で、計14行であった。設問形式としては、内容説明3問、理由説明1問の構成であった。

□は、哲学者である著者が、言葉が人に与える作用のあり方について考察した文章から出題された。文章量は昨年度とほぼ同様の1900字強であった。設問数は例年同様の3問であり、記述解答の行数は、3行・3行・4行の合計10行分で、昨年度と構成・合計行数ともに同じであった。「共生」という具体例に基づいて考察を展開している文章ではあるが、全体として抽象度が高く、具体的内容に即して説明する問一・問二と、さらに抽象度を上げて説明すべき問三との書き分けなど、解答作成には一定の難しさがあつた。

〈特記事項・トピックス〉

□について、著者の坂口安吾は、二〇一二年に文系の第二問で「意欲的創作文章の形式と方法」が出題されている。
 □について、理由説明問題が出題されなかった。この点は、例年一題、ときには二題出題されていた近年の傾向とは異なる出題形式であった。

〈合格への学習対策〉

□ 文系・理系共通問題としては昨年度と同様に随想の出題であった。評論・随想・小説問わず出題される可能性があり、ジャンルにかかわらず広く対策をしておくことが望ましい。あらゆるジャンルの読解と記述対策を行ったうえで、過去問題に十分に取組んでおくべきである。その際、設問に対する適切な応答になるように、本文の要点を正しい論理関係で記述することを意識し、また随想の場合は口語的表現あるいは比喩的表現の一般化を意識的に行うようにしたい。また語彙力の拡充も欠かせない。

□ 文系・理系分離出題から20年が経った。昨年度は、抽象度が低く、わかりやすいテーマを扱った随想からの出題であったが、今年度は哲学者による言葉についての考察からの出題であった。文章が柔らかいものであっても硬質なものであっても、具体的であっても抽象的であっても、論理の主題と筋道を正確におさえて本文全体を読解できる実力を養っておきたい。近年出題が続く言語論、科学論、芸術論など、幅広いジャンルの背景知識を身につけ、柔軟に対応できるようにしておこう。また、今年度も出題された比喩表現を実態的内容に換言する京大頻出の設問への対策も十分行っておきたい。

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

問題分析(本文)

問題 番号	類別 (ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文の レベル
一	随想	坂口安吾 「恋愛論」	愛という言葉に関わる様々な場面に即して日本における言葉と人間の関係について考察する随想からの出題であった。西洋文明を背景とするキリスト教と日本における愛という言葉の違い、明治以降の言葉のあり方、そして恋愛にかかわる事柄における言語と人間の関わりと言った話題を通し、言語のみならず、ものや他者との関わりのあるあり方をめぐる考察が示される。	やや難
二	評論	松永澄夫 『感情と意味世界』	哲学者である著者が、「共生」という語を例に、ある語が主張を伴って繰り返し使用されることで権威化し、人々に特定の価値の承認を要請するまでに至る問題について考察した文章である。	標準

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

設問分析

問題番号	設問番号	設問形式	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問のレベル
一	問一	記述	内容説明。第1段落に書かれている、切支丹の「愛」と日本の「愛」との違いを中心に、当時の切支丹が「大切」という言葉を「苦心のあげくに発明」するまでの「苦勞」についてまとめる。(解答欄4行分)	標準
	問二	記述	内容説明。傍線部前後を中心に「あべこべ」という表現に示されている対比関係をまとめる。「不安」と対応する傍線部直後の内容を端的にまとめる必要がある。(解答欄3行分)	やや難
	問三	記述	理由説明。「ほんとうのこと」に対して筆者が「きれい」という理由について、12段落「そういう素朴な思想が嫌いである」14段落「勝手にそうするがいいだけの話」を中心にまとめる。(解答欄3行分)	標準
	問四	記述	内容説明。筆者の考える「恋愛」とそれについて「考えたり小説を書いたりする意味」を説明する。傍線部以降の内容を中心に、第5段落の内容を踏まえてまとめる。(解答欄4行分)	やや難
二	問一	記述	内容説明。傍線部中の「この語」が「共生」を指していることを確認したうえで、その「スローガン」的性質について本文に即して説明する。傍線部の段落とその次の段落とを中心に〈主張する言葉として繰り返し使用→権威化→当然性を帯びたものとして人々が承認〉という内容をおさえる。また傍線部は「溢れている」までを含むので、「広く(承認)」などと換言しておく。(解答欄3行分)	標準
	問二	記述	内容説明。傍線部の一文が「『人と自然との共生』というフレーズ」について説明するものである点をおさえたうえで、指示語「このような」の内容を具体的に説明する。骨子としては指示内容を本文に即して提示することになるが、〈人は自然がないと生きられないという事実の確認要請→人はこう生きるべきだという特定の価値観への承認要請〉という「→」の間には転化・飛躍があるという点を指摘しておく。また「構造」「内包」も換言しておきたい。(解答欄3行分)	標準
	問三	記述	内容説明。傍線部「語の空洞化」という比喩的表現を、本文に即して実態化して説明する。指示語「ここに」とあるので、最終段落を中心にまとめていくことになるが、傍線が語一般について言及しており、最終設問でもある点より、本文全体を踏まえた抽象度の高い解答を作成するのが望ましい。問一・二の内容を抽象化してまとめ、最終段落冒頭に注目し、「飛躍」、「実質」の「曖昧」について説明したうえで、「語の空洞化」を直前の具体例に基づき抽象化し実態化していく。(解答欄4行分)	やや難

「本文のレベル」と「設問のレベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。